古典系譜 第一卷

古典落語

第一巻

飯島友治編

筑摩書房版

古典落語
第一巻

昭和四十三年五月十日初版第一刷発行
昭和四十九年七月三十日初版第十二刷発行

編者　飯島友治（いいじま ともはる）
発行者　井上達三
発行所　株式会社　筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一（代表）
郵便番号一〇一―九一
振替東京四一二三

印刷所　多田印刷
製本所　矢島製本

装丁デザイン・落合茂

（分類）0376（製品）17101（出版社）4604

まえがき

編者

江戸後期から明治時代にかけて庶民の中で育てられ、その錬磨された見事な話芸により万人に愛好されてきた古典落語は、昨今大きく変貌しようとしている。それは戦後の急激な時代の荒波によって古典落語の社会的基盤が失われると共に、演者の多くが聴衆の嗜好に左右されて、落語本来の笑いが次第に軽薄な爆笑に置き換えられてきたためである。

そこで、本格的な古典落語のもつ、地味にして重厚な、可笑しみと郷愁を誘う味わいを保存すべく、ここに現存の大幹部と故人四師匠が磨きあげた約八十篇を編集する次第である。

古典落語は、江戸言葉は無論、当時の庶民の風俗、習慣、思考等の史料を豊富に保存しており、これを記録しておくことは有意義であると考える。ただ、落語の真価は、腕達者の師匠の所演をじかに鑑賞することによって得られるもので、これを活字にすることは不可能に近いが、本書では、落語の陰翳を伝えるべく、各師匠特有の言い廻し、口癖等の微細な特徴もとらえ、各所にト書を入れた。また、内容理解の一助として解説・解題及び語釈をつけた。解題については繁簡の調和に欠けるとの批判もあろうが、これは形式的一貫性よりも全古典落語の内容の理解に重点をおいたためである。

終りに、本書が出来るまでには多くの人々の援助を受けたが、特に圓生師を初め各師匠方のご援助を戴いた。また編纂については延広真治・小川峯司・伊倉一孝・石川喜よ志・関三喜夫・駒田和子・丸山茂・原田真知子の諸君の多大なご協力を戴いた。ここに厚く謝意を表する次第である。

凡例

一、江戸語の発音・抑揚などを、なるべく忠実に再現するために、適宜仮名の使い分けを行ない、特に片仮名の半音を用いた。

〔例〕「それァそうだ」「俺ァ」「どこィ行くんだ」「とうふゥゥい」「ェェお笑いを」「なんでェ」「間鴨ォやりませんか」「俺ッとこ」等

二、音写したとき意味のとりにくい言葉には漢字を用い、また適宜あて字を用いた。

〔例〕本当に・若年寄・お葬式・吉原・花魁・情人・相手・日本堤・お殿様　等

三、漢字と仮名を、その意味内容に従って、適宜使い分けた。

〔例〕餅を一つやろうか　　酒を一杯だけ飲んだ
　　ひとつよろしく願います　　人がいっぱい集まった

四、古典落語においては間のとり方が重要とされるが、それを間の程度に従って、「少し間」「間」と「…」「……」を使い分けた。なお、言葉の省略の場合も「……」を使った。

五、本文および解説の中で用いた記号の使い分けは次のごとくである。

「　」＝会話、引用など。　　〔　〕＝編者による補足、語注、注釈など。
『　』＝題名・出典・諺・和歌・川柳など。　　〜　＝歌曲などを歌う場合。
（　）＝演者の仕草・ト書など。　　↓　＝「……参照」の略。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目次

明　烏　桂　文楽　七
長屋の花見　柳家　小さん　二五
妾　馬　三遊亭　圓生　四七
崇徳院　桂　三木助　七九
らくだ　三遊亭　圓生　九五
唖の釣　林家　正蔵　一三
高田の馬場　三遊亭　金馬　一五
巌流島　三遊亭　小圓朝　一七
金明竹　三遊亭　金馬　一八五
蔵前駕籠　林家　正蔵　一九九

碁どろ　三遊亭　小圓朝　二〇九
お直し　古今亭　志ん生　二二一
狸　賽　柳　家　小さん　二三九
近日息子　桂　三木助　二五三
野晒し　春風亭　柳　枝　二六五
松山鏡　桂　文　楽　二八三
疝気の虫　古今亭　志ん生　二九三
〔解説〕　大屋と店子（飯島友治）　三〇五

古典落語

第一巻

明(あけ)烏(がらす)

桂文楽

古くから高座へかけられている廓噺の代表的作品であり、新内『明烏夢泡雪』、人情噺『明烏後正夢』の発端を一席物の噺に構成したのである。したがって、花魁の源氏名「浦里」および若旦那の名「時次郎」もそのまま転用されており、文楽師の十八番物の中でも特に傑出した噺である。

昔は相当に淫猥な個所も沢山あり、たとえばサゲ近くで時次郎が「花魁は口でばっかり、起きろ起きろっておっしゃいますが、あたしの足にぐッとからみつき……嘘なら後ろをまくってごらんなさい……」などと、思わせたっぷりに演出したこともあり、時には高座にかけるのも憚られた。

師匠はこの噺を、当時すでに相当の年配であった三遊亭志ん雀から稽古を受け、初めて板〔高座〕にかけたのは二ツ目のさん生時代であった。そのころの演出はかなり色ッぽいものであったが、その後、多くの先輩上手の所演を参酌して研鑽を重ね、ついに本篇のような、いやみも気ざッぽさもない、上品な廓噺に完成した。

師匠は演出について、筆者に次のように語ったことがある。「特に演出に苦心したのは、時次郎を仲ノ町の引手茶屋から送り出す所。茶屋の女将の仕草。翌朝、源兵衛と多助が時次郎を起しに行く所。甘納豆を食べる所など。そして最も楽しく演れる所は、酸いも甘いもかみ分けた父親が、跡取息子があまり堅くては商売上困るし、といって道楽者になってはそれこそ大変だと、あれこれ心配しながらも時次郎を出す所。茶屋の女将が『お巫女さんたちが喜ぶでしょう』という所。遣手さんが、いやがる時次郎を『こちらへいらっしゃい』と、なだめすかして花魁の部屋へ連れて行く所などは、とてもむずかしいですが、大好きなところです」

世界〔時代〕は明治中期。人物の設定は――時次郎の父親日向屋半兵衛は、前身が蔵前の札差で、明治維新を転期に、日本橋田所町に問屋を開業して大成功した金持の大地主。五十五歳前後の、酸いも甘いもかみ分けた苦労人。伜の時次郎は本文どおり。源兵衛と多助は三十五、六歳、当時はどこの町内にもたくさんいた定職のない遊蕩者。貸座敷〔遊女屋〕と引手茶屋は一流の見世。女将は三十代の貫禄のある利け者。浦里が登場するのはサゲ近くで「若旦那、皆さんがお仕度ができたんだから、お起きなさいよ」と、たった一と言しゃべるだけ、ただし、心は口とまるで反対

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

なので、その言い方は大変むずかしい。

落語の演出時間はいろいろの関係で伸縮する。『明鳥』は普通二十分前後であるが、時には二十六、七分かけることもあり、反対に十四、五分に詰めるときもある。そのような場合は枕で加減したり、本文で調節する。たとえば、伸ばすときには、「……藤兵衛ッとこのお稲荷様のお盛物を持ってッたって？　ああ、そうか、それァいいことをした」と、「お膳が出てますから……」の間へ「どうだった？　ご町内の芸自慢の方たちが清元だ、常磐津だというんで賑やかなことだったろう」「へえ、いえ大変に行燈が掛っておりまして、いろいろな絵だの文句が書いてありますんですが、それがみんな間違っておりまして『鼻高きが上にとんび烏』だなどと……お父ッつァんあれは実語教の中にある『山高きが故に尊からず』でございましょう」「ははは……間違ってるはよかったな、あれァお前、間違いではありません。そこが地口というもんだ。まァまァお前さんには、まだその味わいはわからなかろう……」を加えたり、「おいおい君、引出しを違えちゃ……」と晩ぐらい連れ出して……」と間へはいって蒼オい顔して」のあとへ「青表紙（漢籍）を拡げて子曰、しのたまわくと、火の玉ばかり食って……」という件を加えたりする。また時間のないときは枕を省いて最初から「はい、お帰んなさい……」と演るのである。

なお、現在所演の落語は誰のでも、大体似かよっているが、口承文芸の利点といおうか、落語は能・狂言・歌舞伎のように一定した台本・脚本はなく、また、仕草にしても、ある程度は、噺の枠内で演出者の創意工夫をいかして演出を変えても差支えない。それゆえ以前は、人物描写の得手不得手、すなわち老婆の演出は得意だが老夫の不得手な落語家はそれを伏せて、老婆の活躍で老夫を間接に描写した。また筋の運びも、大真打ともなれば適当に直して演出したので、極端に言えば、同じ噺でも十人十色であった。たとえば『明鳥』にしても、引手茶屋の酒宴の時、手持ちぶさたで黙っている若旦那に源兵衛が「若旦那、黙っていないで、ひとつ何か話でもしなさいよ」「では……二宮尊徳という方は……」「若旦那こんな場所で二宮尊徳の話はいけねえ……」という会話を入れた師匠もあった。

サゲは「ぶっつけ落」。

稲荷祭　稲荷は俗に地所の守り神ともいわれ、土地の所有者は武家・町人を問わず、必ず庭の一隅に祀っていた。そして、二月の初午には正一位稲荷大明神の幟を立て、家によっては、地口行燈を掲げ、または囃子屋台をしつらえたり、あるいは芸人を雇って、芝居・茶番などを催し、親類・知人や近所の人々を招いて、いろいろともてなした。なお、初午祭は大名・旗本の邸でも盛大に行われ、当日は近くの町人たちを邸内へ自由に入れて饗応した。

お籠り　参籠ともいう。祈願のため、神社仏閣で夜を明かすこと。時には数日にわたることもある。

引出しを違える　しまう場所をまちがえる。転じて、勘違いをしたり、誤解すること。

田所町　現、中央区日本橋堀留町二丁目辺。旧、通旅籠町と長谷川町の間。古くから大間屋が軒を並べていた。

台の物　遊女屋で客が飲食する場合、酒のほかは俗に喜の字屋という台屋へ注文する。料理・麺類はもちろん菓子・果物まで、すべてこれを台の物と呼ぶのは、大きな蛸足の台に載せて客席へ出すからである。ただし、台と容器は大きくとも、中身は申訳程度で、そのうえ値段は、時代にもよるが平均して市価の四、五倍であった。

茶屋　「引手茶屋」の略称。大見世の遊女屋は茶屋から案内される客のほかは登楼させなかったので、客はまず茶屋の二階で、幇間・芸者一と組（二人）を呼び、ひと騒ぎしてから、幇間・芸者・茶屋の主人か女将・女中・男衆、それに振袖新造・禿たちを引き連れて迎えに来た花魁と一緒に遊女屋へ出向くのである。もっとも、これは本格的な遊び方で、費用も相当にかかる。そこで、なかには茶屋であっさり飲んで、女将か女中に送られて登楼する連中もいた。茶屋は仲ノ町を中心に九十軒ほど並んでいたが、そのうち大門を入った右側の七軒を特に七軒茶屋と呼んだ。

房楊子　明治時代までは、楊子といえば歯ブラシのことであり、今の楊子は、黒文字または爪楊子と呼んでいた。房楊子は楊柳の木を長さ約一五センチ、径約八ミリの棒状に作り、その一端を砕いて房状にしたもの。使う場合は房の部分にむだについている屑を指でつまみ取り、粉歯磨をつけ、縦に（歯に直角）磨いて、普通は一回ごとに捨てる。楊子を売る店は日本橋近くの照降町の猿屋をはじめ諸所にあったが、特に有名であったのは、浅草寺境内で互に美を競い合っていた看板娘たちの店である。ここへは侍・町人の別なく、娘をはりながら大勢買いに来た。

いっぱいのおはこびでございまして、ありがたくお礼を申しあげます。あいだへはさまりまして、相変らずおなじみのお笑いを申しあげることにいたします。

弁慶と小町はばかだなァ嬶あ……

という川柳がございます……男子と生まれてご婦人のお嫌いな方は一名もない。ご婦人だってそうですな。男がなかった日にゃァあのくらいつまらないものはなかろうと思いますが……。

食わず嫌いなんてえ方がございますな。毎日の、この、召しあがりものでもそうで、まるっきり肉類を食べない方がございまして、お年寄にございましたな。

「君、牛、嫌いだってねェ」

「えっへっへ、牛はいけない、とにかくねェ君、あれ、図がよくないでしょ君、涎をだらだら流しの、ねェ君、車の先ィついて、こんなんなって（軽く握った両手を牛の前足に見立て歩く形）歩ってるのを食わなくったっていいでしょ。あゝ、そういうものを食う人にあたしァつき合いたくないと思ってね」

「はッはッは、そんな話をね、他所から聞きました……いまよそからね、間鴨をもらってね、一と人でやってるゝ。間鴨ォやりませんか」

「あゝ、左様ですか。いえ、ありがとう…。私あんまり肉類頂戴しないゝ。間鴨とくるとな、一つぐらいは……」

「やりますか？（後ろを向いて女房に）箸を持っといで、箸を。こちらがやるてェからさ。はッは、やってください、いいえ土足で（じか箸の意）やってくださいよ、遠慮しちゃよくない、おつけなさいな」

「左様ですか？　折角のことで、頂戴をいたします。へ？どうぞお構いくださいますな。お皿ですか、いえ、結構でございます。ェェ、よいところォ伺いましたな（扇子を右手に箸を持つ形）それでは失礼をして。ここいら煮えとォりますか？　あ、左様ですか。いえ、これから二軒ばかり参る所がございんしてな。いえ、たいした、なんでございま（せんと言いかけて）ふゥゥふゥゥ（箸ではさんだ肉を左手で受け、口の中へ箸をたてに入れて、熱いものを食べる形）はは……うん、こらァ、上等ですな、うん。なかなか、こういくもんじゃァ。うまいね、こらどうも。もう一つ頂戴……」

「(少し皮肉に) おおい…善さん、それ、お前さん嫌いだ嫌いだって、それが牛肉なんだよ」
「あはは、これが牛肉なんで……？　いえ、これなら好きなんで……」
　じゃ、最初から好きなんで……。こんな方がいくらもございますな。なかには俺は女は大嫌いだなんてえ方がございます。女なんてえものは見るのもいやだてんで。どうもそばへ寄るとけがらわしい、なァんてんで。お宅へ伺ってみると、子供衆が五人もあったりなんかしてな。なにがなんだかちっともわからない方がある。
「こんちわ」
「おや、おあがんなさい」
「えゝ、過日は……。おや、たいへんに、今日は、お小さいのがいらっしゃいますな、なんですか、これみんなお宅のお子さんで……？」
「家の子です。ヘッヘッヘ、みィんな家のです」
「貴方ァふだん女は嫌い嫌いだとおっしゃってる……」
「はッはは、あゝ、女は嫌いですがね、君……へへ、女房は好きだ」
　なんて、そんな勝手なのァない。こういうのが出るとな、おもしろい話がたくさんございます。
「(大店の主人の貫禄と子への慈しみを十分に示し) はい、お帰んなさい。お前の帰りがおそいんで心配していました。…どうした？　…藤兵衛ッとこのお稲荷様のお盛物を持ってッたって？　ああ、そうか、それァいいことをした。お膳が出てますから御飯をお食べ」
「(真面目な態度としゃべり方で) へえ、あちらでお赤飯を頂戴いたしてまいりました」
「なんだな、お赤飯を頂戴したって……いまの若さに菓子盆の、一と盆ぐらいの赤飯を食べたって腹のたしになるもんじゃない。お膳が出てるんだから食べたらよかろう」
「お煮染のお味がまことに結構でございますために、お代りをいたしまして三杯頂戴をいたしました」
「(困ったように) なんだい？　どうでもいいけどお前、色気がなさすぎるね、(慈愛深く諭し教えるように) お前、地主の息子だよ、え？　差配人の稲荷祭にいって赤飯を三膳お代りしてくるやつがありますか。いくつになります？　十九だよ、来年は二十で……。お前はね、『父母在すときは遠く遊ばず』などと、親孝行で堅くッて結構です。お父ッ

つあん喜んでるよ……え？　そういうもんじゃないんだ。お前が一と間へはいって蒼オい顔をしていてごらん。あいつは勉強しているが悪い病気〔肺結核〕でも出やァしないかなんて、親なんてものァつまらないところを心配するン。親に苦労をかければ不幸の一つですよ、お前にそんなこと言わなくてもわかってるだろうけれども……（人差指で自分をさすつもりで口元へ）あたしが死んじまって（今度は息子をさして）お前がこの身代を引き受けて、旦那方を招待して、どこのお茶屋はどういう格だとか、どこの料理屋はどういう物を食わせるぐらいのことオ覚えてえてもらわないと、いざというときに商いの切先が鈍っていけませんよ。小言じゃないんですよ……うちにばかりいないでお前ちょいちょい表へ出るほうがいいんだが、お前にも弱ったね、どうも……」

「お父ッつあん、ではちょうどよろしい折柄で。ただいま源兵衛さんと太助さんに、あの、表でお目にかかりましたら、あの大層はやるお稲荷様があるから、あの、是非お詣りに行かないかとただいま、あの、さそわれて……。参ってもよろしゅうございましょうか」

「あゝ、源兵衛と太助が？（笑いながら）あッはは、そんな話がちらりとあった。お稲荷様はどッちの方角だと、そいったい？」

「なんでも…浅草の観音様の……あの、うしろのほうだそうで……」

「あッははは、そうか、行っといで行っといで、あゝ。あのお稲荷様は、ばかに繁昌するお稲荷様でね。お父ッつあんなんざ、あのお稲荷様に、若い時分に日参をしたことがある。あんまり日参をしたんで、父親に小言を言われて蔵へほうりこまれたこともあった。行ってきな行ってきな、お前はじめてだから、今日はお籠りをしてきな」

「あのお籠りと申しますと、あの定吉に掻巻かなんかを持たせて……」

「掻巻なんざァ持ってっちゃいけません。遊女屋にかゝ部屋〔遊女が仕度をする所〕てえものがあって、お前は知るまいが源兵衛さん・太助さんご存じだ。あちらィ任しとくがいい。エエと、それから、あのお稲荷様は身装が悪いと御利益がなくっていけないな。婆さん、心配することはない、やるほうがいいよ。え？　着物かい？　あゝ、あゝ、よかろう。おて賽銭が少ないと御利益がないよ……。それから、途中で皆さんな、中継……お前に中継なんといってもわかりはしな

いが、途中でちょっと召しあがるんだ。お酒は頂戴しませんからなんて、震えてちゃァいけませんよ。盃洗へあけるまでも一杯は頂戴しなくっちゃいけませんよ、愛嬌がなくっていけません。ほどのいいところで、手をたたいて会計なんざ野暮ですよ、お前が裏階段からそうッと便所のふりをしておりてって、皆さんの会計をお前が一手で払ってしまうッ」

「あとで、あの…手帳かなんかへつけとォきまして、皆さんからいちいち割前を頂戴する？　……」

「ばかなことォ言っちゃいけません。割前なんか頂戴しちゃァいけません。あの衆は町内の札付だ、割前なんか取ってごらん、あとがこわい。家のことなんざァ心配しちゃァいけませんよ、今日は心おきなく、ゆっくり遊んどいで」

「へえ。では、お父ッつあん行ってまいります」

「（不平顔でちょっと袂を引いて）おい、源さん、おい、君、あたしァ待ってえやしないよ、来やしねえじゃァねえか。おい、よく考えてごらんな、素人の堅い家でもってお前、手前ッとこの伜を吉原へ連れてってくれ…そんなばかな親ァないよ」

「おいおい君、引出しを違えちゃいけないよ、君。そういう意味じゃァないんだ。こないだおやじに床屋で会ったんだよ。『うちの伜のようじゃァまことに困ります、堅いのは結構でございます、堅くなくちゃァいけません、堅すぎます。ものには度てえものがございます。あたくしが承知いたしますから、一と晩ぐらい連れ出してくれ』ッて、ね？親だね、あの、一と間へ入って蒼オい顔して勉強をしてられるてえのが心配なんだよ。堅きゃァ堅いで苦労するしさ、柔かいッてッちゃァ心配するし……。親なんてえものァつまらねえもんだね、あたしゃァもう、つくづく考えちゃったよ。あたしゃァもう、生涯、もう伜で暮そうと思ってッ、親よしちゃって……。子供が出来たら子供を親にしちまおう、つまらねえやな、苦労をして死ぬ（やや遠方に視線を移し、クスッと笑いながら首をすくめて手で口をおおい）おいッ、おいおい、来たよ来たよ。ヘッヘヘ探してるよ、わからねえんだね。……（声を張り）坊ッちゃァん……若旦那ァ…ここですよゥ……。」

「（大店の若旦那らしく、生真面目に折目正しく）おや、どうも皆さん、お待たせをいたしました。父親が、身装が悪いと御利益がなくていけないから、着物を着かえてけなんて申

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.